

# 知識と対象

—間主観性という難問—

田中太一

t.tanaka6002@gmail.com

キーワード： 認知言語学 認知文法 主体化 間主観性 間主観的变化表現

## 要旨

本多 (2016a) は、対象を捉える概念化の主体の知識構造に生じた変化を、対象の変化として捉えることから生じる表現である「間主観的变化表現」の存在を指摘し、分析を行っているが、そこには、客観・主観の区別や、対象と対象に関する知識の区別を前提としているという難点がある。本稿では、これらの区別はいずれも維持しがたいものであることを示し、「変化の相対性」を基準とした分類を行った上で、「体系変化」こそが「間主観的变化表現」と呼ぶに相応しいことを示す。対象は知識体系を通して捉えられているのであり、ある共同体において共通して起こる知識体系の変化を通して対象が把握される場合に「間主観的变化表現」が用いられるのである。

## 1. はじめに

Sweetser (1996: 76) は、(1)・(2) について、チャーホフ作品やシェイクスピア作品ではなく、それを読む主体に変化が生じていると考えられることを理由に、主体の評価や参照基準が変化することによる「主観的な変化」を表す表現であると述べている。本多 (2016a) はこのような「主観的な変化」が共有度の高い知識構造において起こる場合を「間主観的变化表現」として分析している。たとえば、(3) は惑星の定義という社会における共有知識の体系が変化している「間主観的变化表現」だと見なされる<sup>1</sup>。

- (1) Chekhov gets more comprehensible as you get older. (Sweetser 1996: 76)  
(2) Shakespeare just gets better every time I read him. (Sweetser 1996: 76)  
(3) Pluto became a dwarf planet in 2006. (本多 2016a: 258)

本稿では、本多 (2016a) による「間主観的变化表現」分析の検討を通じ、「変化の相対性」に注目することで、より妥当な分析が可能であることを示す。構成は以下の通りである。2 節で

<sup>1</sup> 本多 (2016a) は「間主観的变化表現」・「間主観的コピュラ文」・「間主観的使役表現」をまとめて「間主観性状態表現」として分析している。しかし 6 節で述べるように「間主観的コピュラ文」はその他の表現とは独立に扱うべきである。

- (a) 彼らにとってはもう冥王星は惑星ではない。 (間主観的コピュラ文) (本多 2016: 271)  
(b) でも、ケレスを惑星にするのだったら、EKBO 天体の「セドナ」だって惑星にしてくれたっていいんじゃない? (間主観的使役表現) (本多 2016: 271)

は、「主体化」に関するラネカーの議論と本多 (2016a) による整理を比較し、その問題を指摘する。3 節では客観・主観という区別について、4 節では対象と対象に関する知識という区別について、それぞれ理論的な困難があることを示し、「変化の相対性」を基準にすることでより適切に「間主観的变化表現」を位置づけられると主張する。5 節では、「見透し」構造・「脳透視」論 (大森 1982) を援用し、知識とそれを捉えるための対象の関係を視点配置という形で提示する。6 節では、間主観的コピュラ文の不可能性を示す。7 節では subjective に捉えることと objective に捉えることとの関係を示唆し全体の議論をまとめる。

## 2. 本多 (2016a) による主体化 (I) と主体化 (II) の整理

本節では、本多 (2016a) における主体化 (I) および主体化 (II) に関する議論を概観する。主体化 (I) は、Langacker (1990) で導入された道具立てである。(4) では *the hiker* が実際に移動しているのに対し、(5) では *the new highway* が実際に移動しているわけではない。両者に移動表現が用いられるのは、(4) においてもつばら概念化の対象として捉えられていた移動が、(5) では概念化の主体の (視線の) 移動として捉え直されているためである。

(4) The hiker {went/ran/climbed} up the hill.

(5) The new highway {goes/runs/climbs} from the valley floor to the senator's mountain lodge.

この考えは Langacker (1998) において修正され、(4) にも概念化の主体の (視線の) 移動は存在し、両者の違いはむしろ対象の移動の有無だとされた。ここから「主体化」は「脱客体化」とも捉えられるようになった<sup>2</sup>。(6) はこの段階でのラネカーの主張を本多がまとめたものである。

(6) もともとは概念化の対象と主体の両方に移動があったのが、概念化の対象の側の移動が弱く・消滅して、残された主体の側の移動が顕在化するようになる過程

(本多 2016a: 264)

更に Langacker (2008) では、この考えは (7) のように一般化される。本多はこれを (8) としてまとめた上で、(9) と実質的に同じになりつつあると述べている。本多 (2016a) における主体化 (I) はこの (9) である<sup>3</sup>。

<sup>2</sup> (5) を概念化する話し手・聞き手が実際に視線を動かしている必要はないため、不正確な説明だと思われる。Langacker (2008) の枠組みでは、具体物の移動を概念化する際の身体の動きに伴う認知的過程を、概念化の対象が移動していない際にも用いていると考えることができる。

<sup>3</sup> ただし、(7) は置かれた文脈から、より原型のあるいは典型的な対象に関する経験を、より周辺の対象に関する経験にあてはめるという非対称性を維持しているものと思われる。(8)・(9) ではこの点が捨象されているが、概念化を、有限である注意の焦点を順次移動させて行く過程としてとらえるならば、より前に注意を向けた対象を踏まえて、より後に注意を向けた対象を捉えることも一種の主体化 (I) だと見なすことが可能であり、実質的な差異はなくなるかもしれない (cf. Langacker 2016)。

- (7) ある種の経験に必然的に内在する心的操作を、その経験の内容を捨象して使用し、他の状況に適用すること (Langacker 2008: 537)
- (8) ある事物を概念化するのに必要な認知過程を、それとは別の事物を概念化する際に適用すること (本多 2016a: 265)
- (9) 異なる対象に同じ捉え方を適用して捉えることが、異なる対象に同じ言語表現を適用することが可能になる仕組みの一つである。 (本多 2016a: 264)

主体化(Ⅱ)は、Langacker(1985, 1990)で導入された道具立てである。(10)では「私」は概念化の対象になっているのに対し、(11)では「私」は概念化の主体にとどまっている<sup>4</sup>。Langacker(1990)は概念化の主体と概念化の対象の関係を、眼鏡は、かけている時には subjective に捉えられるが、外して観察すると objective に捉えられる。車で大学に移動する際、自宅は暗黙の出発点として subjective に捉えられているが、自宅と大学の位置関係を示すために地図を描く際には、自宅は objective に捉えられている。恐怖や願望や高揚感といった感情は、反省することなしにただ経験するだけであれば subjective に捉えられているが、感情を分析して反省的に捉える際には、感情やそれを経験する主体は objective に捉えられているなどの例を挙げ説明している。ここから、主体化(Ⅱ)は、(12)として規定することができる。一方で本多(2016a)は主体化(Ⅱ)を(13)のようにまとめている。

- (10) Vanessa is sitting across the table from me. (Langacker 1990: 20)
- (11) Vanessa is sitting across the table. (Langacker 1990: 20)
- (12) 概念化の対象が概念化の主体として捉えられるようになる過程。
- (13) 同じ対象に異なる捉え方を適用して捉えることが、同じ対象に異なる言語表現を適用することが可能になる仕組みの1つである。 (本多 2016a: 266)

本多は主体化(Ⅱ)を「捉え方(construal)」と同趣旨であるとしている。これは、ラネカーの主張と矛盾するわけではないものの、極めて高度な一般化を経たものとなっている<sup>5</sup>。眼の前を横切った個体を「犬」として捉えるか「動物」として捉えるか「茶色いモノ」として捉えるかという選択と、概念化の主体(の一部)を含むように概念化の対象を構成するか、概念化の主体を含まないように概念化の対象を構成するかという選択は同一ではない。前者では、見えそ

<sup>4</sup> Langacker(2007)では、私(たち)の概念化において(少なくとも話し手と聞き手の概念化)が入れ子状になっており、概念化の対象として捉えられた I(私)は、話し手が、聞き手から見た対象としての話し手として捉えた対象だとされている。このような捉え方が可能であるためには、話し手は、聞き手にとっての概念化の対象である当の人物が、話し手自身であることを知ることができるのでなければならない。このことを知るためには、話し手自身から見た話し手、すなわち視座の中心に位置する身体に関する知識が必要である。もしこのような知識がないならば、話し手は、どれだけ聞き手の見えを想像したところで、あるいは仮に、聞き手の見えが直接得られたとしても、その見えの中に含まれる人物が話し手自身であることを理解できず、自身を(もっぱら概念化の対象として)捉えることができないだろう。

<sup>5</sup> 本多(2016a: 266)は(13)を提示する際に「Langackerがこのタイプの主体化を提唱することで捉えようとしたことを筆者の言葉で一般化して述べれば、次のようになる」と述べている。ここから、本多自身はラネカーと(重なりは持つものの)異なる主張をしていると意識しているものと思われる。

のものはあるレベルでは同一であるが、後者は（概念化の主体を objective に捉えた場合、見えの中に概念化の主体が現れるために）見えそれ自体が異なるのである<sup>6</sup>。本多による整理ではこの点を捉えることができない。

### 3. 主観と客観という問題

本多 (2016a) によると、(14) は「間主観的変化表現」であり、(15) は「通常の状態変化表現」である。主語の指示対象に「客観的」な変化が生じている (15) のような例とは異なり、(14) では、「冥王星という星それ自体には客観的な変化は何も生じていない。宇宙戦艦ヤマトが冥王星に波動砲を撃ち込んだ結果、冥王星が破壊されて惑星にふさわしい大きさを失った、というようなことではない。科学者たちの協議によって「惑星」の定義が変更され（というよりは確定され）、その結果それまで漠然と「惑星」にカテゴリー化されていた冥王星が「惑星」カテゴリーから除外されてあらためて「準惑星」としてカテゴリー化された」（本多 2016a: 257）のであり、「私たちの知識体系」の変化を表しているとされている<sup>7</sup>。

(14) Pluto became a dwarf planet in 2006. (本多 2016a: 258)

(15) The child will become an adult. (本多 2016a: 258)

本多 (2016a) はさらに、変化するのが対象か、対象を位置づける体系かという「変化の相対性」を基準に、「間主観的変化表現」を二分している。(16) は (14) と同じく「間主観的変化表現」とされるが、「惑星」の定義が変更されたわけではなく、冥王星に関して新たな事実が明らかになり私たちの知識が変化したことで、冥王星の位置づけが変化する事象を意図した文である。すなわち両者は「変化の相対性」において対立している<sup>8</sup>。本稿では、(14) のように「対象を位置づける体系」が変化するものを「体系変化」、(16) のように「対象（に関する知識）」が変化するものを、客観的な変化が存在するとされるものも含め「対象変化」と呼ぶ。

<sup>6</sup> ここで、(9)・(13) における「異なる対象」・「同じ対象」が誰にとって異なる／同じなのか問題になるように思われる。本多 (2005: 278) では「一般論として、客観的には異なる事態に対して同一の捉え方をすることは、多義性の根拠となりうる。そして「客観的には異なる」とは、言い換えれば「観察的立場からは異なって見える」ということであり、「同一の捉え方をすること」とは、「主体的立場からは同一と見える」ということである」とされている。ここでの、「観察的立場」とはおおよそ、言語の分析者としての立場であり、「主体的立場」とはおおよそ、言語の使用者としての立場である。この主張が、本多 (2016a) でも維持されているとすると、主体化 (II) を捉え方 (construal) とみなす分析は、異なる捉え方で捉えられる conceptual content が主体的立場から見ても同じ対象でありうるという事実を適切に扱えるのか疑問である。私 (たち) は、現に (常にではないにせよ) 自身の捉え方を捉え方として把握可能である。捉え方が捉え方であることを知るためには、そこに共通する conceptual content を捉えているのでなければならない (捉え方と conceptual content の関係については、田中 (2018) を参照されたい)。

<sup>7</sup> 多くの人が、科学者たちの協議によって変更 (あるいは確定) された惑星の定義を自然に受け入れるのは、惑星に関する日常の実践がそれほど豊かでないためであろう。惑星の定義は、科学者たちに任されているのである。知識体系の変化にはこのような「言語的分業 (division of linguistic labor)」（Putnam 1975）が深く関わっていると考えられる。当然のことながら、全ての概念がこのように特定の専門家集団によって定義されるわけではない。たとえば、スイカは植物学的には野菜に分類されるが、多くの人は果物として扱う実践を手放していない。また、複数の専門家集団が異なる定義を採用することもあるだろう。

<sup>8</sup> もちろん、(14) を (16) のように (16) を (14) のように解釈することは可能である。「変化の相対性」において対立するのは、あくまで、両者をここで意図されたとおりに解釈する場合である。

## (16) So could Pluto become a planet again?

(本多 2016a: 258)

本多 (2016a) は「通常の状態変化表現」(15) と「間主観的変化表現」(14)・(16) を区別した上で、両者に同じ言語表現（この場合には become）が用いられる理由を、主体化（I）によって説明する。すなわち、「客観的」な変化と私たちの知識の変化の両方が生じている「通常の状態変化表現」に用いられる「捉え方」を、私たちの知識のみが変化した場合の「間主観的変化表現」にも用いていると主張しているわけである。ここで問題になるのが、本多 (2016a) が「客観的」をどのように捉えているかである。この点に関しては、はっきりと述べられているわけではないが、「客観的あるいは物理的な変化」(本多 2016a: 260) という表現が用いられていることから、「客観的」は、「物理的」とおおよそ等しい意味で使われていると考えられる。しかし、ある事態が「物理的」なものかどうかとも究極的には概念化の主体による「捉え方」に依存するのであり、明らかに「対象」ではなく「捉え方」の側に属する。何が「物理的」であるかは、私たちの知識構造に依存するのである。そのため「客観的」を「物理的」と読み替えると「通常の状態変化表現」と「間主観的変化表現」の区別は無効化し、(9) の原理を当てはめることはできなくなる<sup>9</sup>。

さらに、「客観的」を「物理的」の言い換えではなく、「捉え方に依存しない『ありのまま』の対象」と考えることも出来ない。このような考えには、酒井 (2013: 58) が主張するように、「現実構成主義 に対するもっとも素朴でもっとも痛烈なパンチは、どうして「ヒトの生きる世界は『ありのまま』の現実ではなく、認知活動によって構成されたものだ」と分かるのか、どうして「言語が語る意味の世界は客観的な世界そのものではなく、われわれ人間の目を通した世界」だと分かるのか、と問うことだろう。人間の認識から独立した「ありのままの現実」や「客観的な世界そのもの」をいつ誰が見たと言うのか。人間の認識が届かない世界と人間の認識の内容をいつ誰が比べたと言うのか。これは明らかに不可能な企てであるように思われる」という問題があるのである<sup>10</sup>。以上の議論から、変化が物理的かどうかという基準、すなわち主体化（I）によって捉えられた「通常の状態変化表現」と「間主観的変化表現」の差異は維持しがたいものであることが分かる<sup>11</sup>。

<sup>9</sup> (15) においても、「子供」は「私たちの知識体系において子供であるもの」であり、「大人」は「私たちの知識体系において大人であるもの」である。「私たちの知識体系」とは独立に、ある「対象」が「子供」であったり、「大人」であったりするという想定は、不可能であるか無意味であるように思われる。

<sup>10</sup> 現実構成主義とは、大堀 (2002: 2) に見られるような、「ヒトの生きる世界は『ありのまま』の現実ではなく、認知活動によって構成されたものだ」とする立場のことである。

<sup>11</sup> 「物理的」の場合と同じく、「客観的」とは私たちの知識体系において客観的であることだと考えることも可能である。その場合には、「知識体系の共有度合いが高いもの」を「客観的」とみなしていることになるだろう。しかし、それこそが「間主観性状態表現」が表すもののはずである。冥王星が準惑星になるのは、多くの人が惑星の定義を共有するからである。この意味で「客観的」であるかどうか「捉え方」の問題であることは言うまでもない。

#### 4. 対象と対象に関する知識

私（たち）が対象を objective に捉える際、その対象をカテゴリー化するための基準となる知識は subjective に捉えられている。つまり、ここでは（ラネカーの言う意味での）主体化（Ⅱ）すなわち、(12) が関わっている可能性がある<sup>12</sup>。本稿では、本多 (2016a) によって提示された「間主観的变化表現」は、基準の変化を（その基準によって位置づけられる）対象の変化として捉えた文である「体系変化」の場合には、主体化（Ⅱ）の事例であり、「体系変化」であれ「対象変化」であれ、どちらも概念化の主体の知識の変化によるものであることから主体化（Ⅰ）の事例であるとみなすことができると考える<sup>13</sup>。

本稿と本多 (2016a) の違いは、(17) の可能な解釈である (18) ~ (20) の分類を通じて示すことができる。本稿では、(18)・(19) はどちらも「対象変化」であり、(20) は「体系変化」であるとする。一方で、本多 (2016a) の主張からすれば、(19)・(20) は「間主観的变化表現」であり、(18) は「客観的变化表現」であることになるだろう。

(17) 太郎は成人になった。

(18) 《太郎は時間経過によって年をとり 20 歳になった。》

(19) 《19 歳だと思われていた太郎の生年が 2 年早かったことが判明して太郎は成人になった。》

(20) 《成人の基準が 18 歳に引き下げられて現在 19 歳である太郎は成人になった。》

本多 (2016a) は「客観的变化表現」の例として (21) ~ (23) を挙げている。すなわち、これらが表す事態において、主語の指示対象に「客観的」な変化が生じていることになる。しかし、ある変化が、概念化の対象に関する（概念化の主体の）知識のみのも（すなわち知識構造だけに起こる変化）であるか、概念化の主体と概念化の対象両方のものであるかは何によって決まるのだろうか。この間に答えるためには、少なくとも概念化の対象とはどのようなものかを明らかにする必要がある。仮に概念化の対象の身分が不確かなものであれば、文によって表される変化が概念化の対象それ自体のものかどうかを判断することは不可能だからである。しかしこれは、明らかに困難な課題である<sup>14</sup>。たとえば (22) における *They* とは一体何だろう。候補にあがるのは、*They* の指示対象である「彼ら」の身体や精神だろう。しかし、ある人が別の人と友達であることは、当人の身体や精神を観察すれば分かることなのだろうか。(23) は更に説明が困難な例である。ある人がプロのサッカー選手かどうかは、何よりもその人の所属や肩書に依存するだろう。では、彼らの所属や肩書は概念化の対象の一部を成すのだろうか。

<sup>12</sup> もちろん、その基準自体は客観的（物理的）なものではないために、主体化（Ⅰ）も関わっていると言うことはできる。

<sup>13</sup> 本多 (2016a: 258) も「事物を見る枠組みの変化は主体自身の変化であり、したがって認知文法 (Cognitive Grammar) の言葉でいう subjective construal を受けるものである」と認めている。

<sup>14</sup> 物理と非物理という違いを自明視するのであれば、困難は見られないかもしれない。

- (21) The child will become an adult. (本多 2016a: 256)  
 (22) They became great friends. (本多 2016a: 256)  
 (23) After leaving school, he became a professional footballer. (本多 2016a: 256)

このように考えていくと、(16)における変化が概念化の対象ではなく、概念化の主体のみに起こるものとみなすことの妥当性が疑わしくなる。たしかにここでは、冥王星に関する知識の変化が起こっている。しかし、冥王星に関する知識は、冥王星がどのように捉えられているかと対応しており、その点で概念化の対象である冥王星の一部だとみなすことも可能である。概念化の対象の身分がどのようなものか決して自明ではない。これはより一般的に言えば、対象に関する知識から独立に対象を捉えることは可能かという問題である。(16)に即して言えば、冥王星に関する新事実が明らかになったならば、それ以前からその事実は知られていないだけで冥王星の性質であったとも言える。では、その場合、冥王星はいつから惑星であった（あるいは、惑星になる）ことになるのだろうか。準惑星だとされていたときにも実は惑星だったのか、あるいは新事実が明らかになるとともに再び惑星になるのか。

本多 (2016a) が提示する客観か（間）主観かという基準は、このように認識・存在論的な難問を含むものであり、いまだ十分に正当化されているとは考えられない。一方、本稿では、「体系変化」・「対象変化」という「変化の相対性」を基準とする議論を行っており、本多のような困難は回避されると考えられる。

## 5. 対象は知識越しに捉えられている

主体化は（ⅠであれⅡであれ、「XがYになる」という）二者関係である。私（たち）の概念化は、必ず何らかの視点から、何らかの認知過程を通じて行われるため、主体化（Ⅰ）の動機となる、対象を捉える際の認知過程（以下：主体的把握）、主体化（Ⅱ）の動機となる視点配置（viewing arrangement）は、どちらもあらゆる言語表現の背後に存在するはずである。本多 (2016a) は (24) を主体化（Ⅰ）の事例とみなす。つまり、(24) は (25) と共通する主体的把握に動機づけられた表現だと主張していることになる。たしかに、冥王星が粉々になることと、惑星の定義が変わることは別の事態である。その意味でここに本多の言う主体化（Ⅰ）関係が存在するとは言えるだろう<sup>15</sup>。しかし、(24) は (26) との関係で捉えることも可能なのである。

- (24) 冥王星が準惑星になった。（惑星の定義が変わったことによって）  
 (25) 冥王星が準惑星になった。（冥王星が粉々になったことによって）  
 (26) 惑星の定義が変わった。

ここで起こっていることは、Langacker (1990) による眼鏡の例を通じて適切に捉えることができる。本多 (2016b: 101) は「たしかに眼鏡は人間とは独立した存在物である。しかし眼鏡を

<sup>15</sup> ただし、このように考えた場合、主体化（Ⅰ）の範囲は際限なく広がってしまう危険性がある。



っていく現象」(本多 2016b: 101) を認めながらも、「Langacker の枠組みでは、subjectively construe されうるものは認識の主体と認識それ自体（認知過程ないし概念化）である。一方、事態というものは認知能力をもつ実体ではない。したがって、一般に事態は認識の対象であって主体にはなりえない。つまり事態は一般には subjective construal されることはない」(本多 2016b: 103) と述べ<sup>18</sup>、あくまで認識主体と事態とを峻別する立場を維持している<sup>19</sup>。しかし、ここには矛盾が存在する。自己が環境へと広がるとは、(典型的には) 事態とされる対象が、自己に含まれ（すなわち、認識原点と対象の間に配置され）、subjective に捉えられるようになる現象に他ならない。

「体系変化」では、認識原点から対象までの subjective に捉えられる範囲に変化が生じている<sup>20</sup>。この変化が言語共同体において広く生じているのであれば、共有知識の変化が起こることになる。このような「体系変化」こそ「間主観的变化表現」と呼ぶにふさわしいと考えられる。

3 節で述べたように、本多 (2016a) は、「間主観的变化表現」を自身がまとめ直した主体化 (I)、すなわち (29) によって説明している。ここまでの議論から、異なる対象とみなされていた、「対象」と「対象に関する知識」との間に明確な境界は存在せず、むしろ、「対象」は「対象に関する知識」を含むような仕方 で存在していることが明らかになった。「対象変化」はすべて通常の状態変化表現だと考えられるのである。本稿の立場からは、「体系変化」において同じ捉え方が適用されるのは、(ラネカーの言う意味での) 主体化 (II) すなわち (12) によって、知識体系の変化が subjective に捉えられているからであると言える<sup>21</sup>。

(29) = (9) 異なる対象に同じ捉え方を適用して捉えることが、異なる対象に同じ言語表現を適用することが可能になる仕組みの一つである。 (本多 2016a: 264)

## 6. 間主観的コピュラ文は可能か

前節までで論じたように、「間主観的变化表現」は、「変化の相対性」によって、「体系変化」と「対象変化」に分類することが可能であり、そのうち「間主観的变化表現」とみなすことが可能なのは、概念化の主体によって subjective に把握された基準における変化を表す「体系変化」である。

同様の分析は「間主観的コピュラ文」に対しても当てはまるだろうか。これは一見して分かるように不可能である。コピュラ文は（少なくとも典型的には）変化を表さないために、「変化

<sup>18</sup> 「一般に」とあるのは、感情経験のようにそれ自体が事態であり得る認知過程を踏まえてのものである。

<sup>19</sup> 本多 (2016b: 104) は「subjective construal を事態把握のあり方を指す用語に転用する可能性も出てくるわけであるが、その転用は本章では採用しない」と述べている。

<sup>20</sup> 本稿では、共有知識の体系に注目したために、「体系変化」という命名を行ったが、このような現象は原理的には、subjective に捉えられたあらゆる要素に当てはまるものである。

<sup>21</sup> 惑星の定義変更のような知識体系の変化が subjective に捉えられていることは確かだとしても、それがもともとは objective であるとまでは言えないのではないかという疑問が生じるかもしれない。しかし、少なくとも明示的知識については、知識越しに対象を捉えられるようになるためには、まずはその知識が対象として捉えられるのでなければならないだろう。

の相対性」が存在しない。それでは、これらの文は、subjective に捉えられた何らかの「体系」が関わっているという意味で「間主観的」だとは言えるだろうか。ここで注意すべきは本多 (2016a) の挙げる「間主観的コピュラ文」の例 (30)・(31) には、*For them・for us*・「彼らにとって」などの判断の基準となる概念化の主体が示されているという点である<sup>22</sup>。つまり、「間主観的コピュラ文」の視点配置は、[認識原点<sub>1</sub>—知識—対象 (認識原点<sub>2</sub>—知識—対象)] のようになっていると考えられる。ここでは、自己あるいは他者からの見えそれ自体が概念化の対象となっている<sup>23</sup>。

(30) ‘Planet’ as we mean it is not as the astronomers mean it, child. For them, Pluto is not a Planet, not any more, not according to their classification. But Kenadandra is and was and always will be a planet, for us. It is the same with the Moon, with Sulva. (本多 2016a: 254)

(31) 彼らにとってはもう冥王星は惑星ではない。 (本多 2016a: 271)

「間主観的変化表現」として挙げられている例には、このような表現は含まれていない。体系の変化を objective に捉えた上で「対象変化」を表す (32)・(33) は、対象として捉えられた「知識構造の変化」という客観的な事象を前提にしているため「体系変化」ではなく、「間主観的変化表現」とみなすことは困難であろう。

(32) 科学者たちの協議によって、2006年に冥王星は準惑星になった。

(33) 惑星の定義変更によって、2006年に冥王星は準惑星になった。

コピュラ文が間主観的であるためには、基準を objective には表現せず、かつ「客観的」とはみなせない文として成立する必要がある。では、(34)・(35) は「間主観的」だろうか、それとも「客観的」だろうか。ここで議論の対象になっているコピュラ文は、大雑把にいつて「XをYとみなす」あるいは「XをYという意味のもとで捉える」というような意味を持つものだろう<sup>24</sup>。(34)・(35) では、Xは「冥王星」であり、Yは「惑星」である。

<sup>22</sup> これらの例は、佐藤 (1998, 2005) で論じられた「計算式」やそれを想起させる情報を含む「計算的推論のナル」と同様に分析できると思われるかもしれない。佐藤 (2005: 18) によると計算的推論とは、「何らかのルールや基準 (これを「計算式」と呼ぶことにする) を認めた上で客観的に推論した結果、必然的にえられた結論に至るプロセス」である。このことは、「計算的推論のナル」が表す事態は、それがいつ起こったかを問えないということの意味する。たとえば (c) について、冥王星が惑星でなくなったのはいつなのかと問うことは馬鹿げているだろう。それに対して「体系変化」の「間主観的変化表現」の場合には、それが起こるのがいつなのかを問うことができる。つまり、「間主観的変化表現」が表すのは、実際に生じた (あるいは少なくとも生じうる) 変化なのである。本多 (2016a: 270) は「計算的推論のナル」は「間主観的変化表現」と対応するとしているが、この差異を無視して、両者を概念化の対象が変化せず、もっぱら知識の変化に依存するという共通点を根拠に「間主観的変化表現」としてまとめてしまうのは無理があるだろう。

(c) 彼らからすれば冥王星は惑星ではないことになる。

<sup>23</sup> 認識原点<sub>1</sub>と認識原点<sub>2</sub>が等しいことは「私にとって」などによって、異なることは「彼にとって」などによって表される。注4で触れた話し手自身を概念化の対象とする認知過程は、認識原点<sub>1</sub>に認識原点<sub>2</sub>が含まれるという入れ子構造の現れの一つである。

<sup>24</sup> もちろんX・Yそれ自体もまた、X・Yとみなされ、X・Yという意味のもとで捉えられたがゆえにX・Y

たとえ「惑星」が定義変更を被ったとしても、あるいは本多 (2016a) が言うように冥王星に何らかの新事実が明らかになった場合や、冥王星が粉々になった場合であっても、その来歴はコピュラ文のみによっては表しえない。すなわち、コピュラ文は X や Y が過去に被った変化を直接的にはその意味に含まず、文が表す時点における X と Y の関係を表しているのである。

(34) Pluto is not a planet.

(35) もう冥王星は惑星ではない。

(36)・(37) は「主観的コピュラ文」とされる例であり、「間主観的コピュラ文」の例 (30)・(31) と同様に、*for me*・「わたしにとって」という判断の基準となる概念化の主体が示されている。本多 (2016a: 257) では、「主観的」と「間主観的」の違いは知識の共有度の違いであり、その意味でこの違いは量的な違いである」とされている。つまり、判断の基準となる表現が、「私」や「彼」の場合には主観的コピュラ文であり、「私たち」や「彼ら」などの場合には「間主観的コピュラ文」であることになる。

(36) Pluto will always be a planet for me. (本多 2016a: 258)

(37) わたしにとって冥王星は、今後とも永遠に惑星である。 (本多 2016a: 271)

しかし、「間主観的」とは概念化の対象ではなく、概念化の主体において関係（この場合にはコピュラ関係）が成立する場合に用いられる名称のはずである。「間主観的変化表現」であれば、私たちの知識の変化によって概念化の対象が変化する事象（「体系変化」）を表せるが、コピュラ文にはそれに対応する表現は存在しない。「間主観的コピュラ文」は成立しえないのである<sup>25</sup>。このことはまた（矛盾するようであるが）次のように言い換えることもできる。コピュラ文はもっぱら私（たち）の知識に依存するという意味で（間）主観的であり、したがって客観的コピュラ文は存在しない。

## 7. おわりに

本稿では、本多 (2016a) による「間主観性状態表現」分析を検討し、客観・（間）主観という区別や、対象と対象に関する知識の峻別には理論的困難があることを指摘し、「変化の相対性」に注目することで、「体系変化」・「対象変化」というより妥当な線引きが可能であることを示した。

最後に、概念化の主体の変化が *subjective* に捉えられているというのはどのようなことか、ごく簡単に検討しておきたい。再び参考になるのは眼鏡の例である。赤い色の眼鏡をかけると、対象が赤色を帯びて見える。壁を見ている最中に赤色の眼鏡をかけた人は、その経験を (38)

なではあるが、ここではこの点には深入りしない。

<sup>25</sup> 同様に、「主観的コピュラ文」という分類も成立しないと思われる。

のように述べることができる。では、(38)の発話者は、壁が概念化の主体の捉え方とは独立に、本当に赤くなったと考えているのだろうか。また、聞き手は、壁が本当に赤くなったと理解するのだろうか。ごく普通のコミュニケーションでは、(38)はおおよそ(39)のように理解されるのが自然だろう。このことは、視点配置において subjective に捉えられている要素が、objective に捉えられている対象のあり方に影響することを示唆する。同じように(1)・(2)では、ある人がチェーホフ作品やシェイクスピア作品を何回読んだところで、その面白さや魅力が概念化の主体の捉え方とは独立に本当に増すわけではないだろう。仮に、この種の変化が言語共同体全体に生じ、共有知識の体系が変化したとしても、対象が本当に変わったとはみなされないだろう。(3)のような「体系変化」との違いは知識の共有度だけで捉えられるものではない。objective に捉えられている対象について語ることに、subjective に捉えられている要素が何らかの仕方で示されているのである<sup>26</sup>。

(38) 壁が赤くなった。

(39) 壁が赤く見えるようになった。

## 参考文献

- 本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論』 東京: 東京大学出版会。
- 本多啓 (2016a) 「間主観性状態表現」 藤田耕司・西村義樹 (編) 『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ生成文法・認知言語学と日本語学一』: 254-273. 東京: 開拓社。
- 本多啓 (2016b) 「Subjectification を三項関係から見直す」 中村芳久・上原聡 (編) 『ラネカーの(間) 主観性とその展開』: 91-120. 東京: 開拓社。
- 小柳智一 (2018) 『文法変化の研究』 東京: くろしお出版。
- Langacker, Ronald W. (1985) Observations and Speculations on Subjectivity. John Haiman (ed.), *Iconicity in Syntax*, 109-150. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (1990) Subjectification. *Cognitive Linguistics* 1: 5-38.
- Langacker, Ronald W. (1998) On Subjectification and Grammaticization. Jean-Pierre Koenig (ed.), *Discourse and Cognition: Bridging the Gap*, 71-89. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. (2007) Constructing the Meanings of Personal Pronouns. Günter Radden, Klaus-Michael Köpcke, Thomas Berg, and Peter Siemund (eds.), *Aspects of Meaning Construction*, 171-187. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald (2016) Baseline and elaboration. *Cognitive Linguistics* 27: 405-439.
- 野矢茂樹 (2016) 『心という難問 空間・身体・意味』 東京: 講談社。

<sup>26</sup> これは、眺望論における「有視点的把握」と「無視点的把握」の相互依存の現れである(野矢2016, 田中2018)。

- 大堀寿夫 (2002) 『認知言語学』 東京: 東京大学出版会.  
大森荘蔵 (1982) 『新視覚新論』 東京: 東京大学出版会.  
大森荘蔵 (1994) 『時間と存在』 東京: 青土社.  
Putnam, Hilary (1975) *Mind, Language and Reality: Philosophical Papers Vol. 2*. Cambridge: Cambridge University Press.  
酒井智宏 (2013) 「認知言語学と哲学—言語は誰の何に対する認識の反映か—」 『言語研究』 144: 55-81.  
佐藤琢三 (1998) 「自動詞ナルと計算的推論」 『国語学』 192: 118-107.  
佐藤琢三 (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』 東京: 風間書院.  
Sweetser, Eve E. (1996) “Changes in Figures and Changes in Grounds: A Note on Change Predicates, Mental Spaces and Scalar Norms” 『認知科学』 3 (3): 75-86.  
田中太一 (2018) 「「同じ事物」と「ありのままの現実」」 『東京大学言語学論集』 40: 239-249.

## Knowledge and Objects: The Conundrum of Intersubjectivity

TANAKA Taichi

t.tanaka6002@gmail.com

**Keywords:** cognitive linguistics, Cognitive Grammar, intersubjectivity,  
intersubjective change expressions

### Abstract

Honda (2016a) analyzes what he calls “intersubjective change expressions,” in which an object of conceptualization changes due to some change in the knowledge structure of the conceptualizer who construes that object. After pointing out that his analysis has the disadvantage of assuming an objective-subjective distinction as well as a distinction between an object and knowledge about the object, this paper shows that both distinctions are untenable, proposing an alternative classification of change expressions based on “relativity of change.” It goes on to argue that an expression is properly called an “intersubjective change expression” precisely when the change it depicts corresponds to “a changes in a system.” Objects are construed in reference to some system of knowledge, an “intersubjective change expression” being used to talk about an object that is apprehended in terms of a change in such a system occurring throughout the relevant speech community.

(たなか・たいち 東京大学大学院)